

中学校国語科における生徒の主体的な学びを目指す授業づくりについて

- 課題設定と手立ての工夫 -

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
山本 博子

実習責任教員 藤井 伊佐子
実習指導教員 大林 正史

キーワード：課題設定と手立ての工夫，帯単元，模倣

1. 研究課題設定の理由

(1) 課題意識

これまで自分自身が行ってきた授業を振り返ると、教師による一方向的な講義形式の「教え込み型授業」が主流であったように思う。確かに、そのような形態の授業も必要だが、それだけではなく、もっと生徒自らが意欲を持って、主体的に取り組む授業を実践するにはどうすればよいのか。一度立ち止まって、国語の「授業」について、改めて考える必要性を感じた。新学習指導要領（平成 29 年）から、中学校国語科の目標について、以下に抜粋する。

- (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

今後「社会生活」を送る生徒たちが、「社会生活」を送るために必要な国語の力（知識及び技能，思考力，判断力，表現力等）を身につけることが挙げられている。そしてそれらは、「社会生活における人との関わりの中」で学ばれるべきだと述べている。コミュニケーションの希薄

な人間関係，表現力の乏しさ，コミュニケーションをとることの困難さ等を抱える様々な生徒たちの実態を見る時，この目標の意義を痛感する。このような視点から，国語の授業づくりを考える時，具体的にはどのような課題設定や手立ての工夫ができるのか。本実践研究においてその可能性を探ってみたい。

(2) 学校アセスメントの概要

①実習校の概要

実習校の概要をまとめると次のようになる。

- ・校区は，那賀川下流の南岸地帯に広がる農村地帯である。世界的に有名な LED の企業がある。
- ・全校生徒 324 名，各学年 3 クラス，特別支援学級 2 クラス，計 11 学級。
- ・校区にある 5 校の小学校から入学する。

②アセスメントの概要

「全国学力・学習状況調査」における生徒質問紙の回答結果分析と国語科教員への聞き取り調査を実施した。

表 1 「全国学力・学習状況調査」（平成 28 年度・29 年度）の生徒質問紙の回答結果

（「当てはまる」，「どちらかと言えば当てはまる」という肯定的な回答をした生徒の割合について）

項目	年度	28	29
「国語の勉強は好きですか。」		7 割強	5 割弱
「国語の勉強は大切だと思いますか。」		9 割強	9 割強

「国語の授業の内容はよく分かりますか。」	8割強	7割強
「今日の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありました。最後まで解答を書こうと努力しましたか。」	ほぼ全員	ほぼ全員

これらの結果から、年度によって多少の差はあるが、国語の学習や授業に対して、肯定的な考えや態度を示している生徒が多いことが分かる。また、最後まで解答欄を埋めようとする、前向きで真面目な態度も見受けられる。

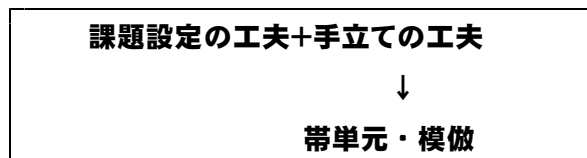
表2 国語科教員への聞き取り調査

	良さ	課題
一年	大きな声で音読できる。 答えに自信がある発問に対しては意欲的に発言できる。	要点など、自分でまとめることが苦手。 落ち着いて授業を受けられない者、静かに座っていても、聞けていない者がいる。
二年	よく意見を言う。 読書好きな生徒が多い。	言われたことはするが、それ以上はしようとしめない。
三年	落ち着いて学習に取り組める生徒が多い。 音読する時に声を出そうとする生徒が多い。	複数の資料を活用して作文を書くことが苦手。 正確に聞き取ることが苦手。

これらの結果から、全体的に授業に対して前向きな姿勢が感じられる生徒が多いので、発問や課題設定、学習形態等の工夫をすれば、より意欲的な取組が見られそうだと感じた。その一方で、板書をスムーズに写したり、話を正確に聞き取ったりすることが苦手な生徒が少なからずいるようなので、授業におけるユニバーサル化（可視化）が必要だと思われる。

どの生徒にとっても「楽しい」「分かる」と実感できる国語の授業を実践するため、「課題設

定と手立ての工夫」を二本柱とした授業づくりを考えていきたい。(図①)



図① (授業づくりの柱について) 筆者作成

2. 先行研究・先行実践事例

(1) 「課題設定の工夫」について

①第46回徳島県中学校国語研究大会研究紀要より

「課題設定の工夫」とは何か。その考え方（捉え方）について、上記研究紀要より引用する。

<p>言語活動における思考力・判断力・表現力はそれらが働く主体的・対話的な問題発見、問題解決の場面を経験することで磨かれていく。また、既存の知識や技能も経験の中で活用されていくことで定着していく。</p> <p>①思考力・判断力・表現力を活用し、様々な思いや考えを深められる課題</p> <p>②実生活や自然・社会の諸問題につながる課題</p> <p>③交流活動や振り返りによって、自ら解決策を検討・修正できる課題</p>

②第46回徳島県中学校国語研究大会公開授業より

ア. 実践の概要

授業者は「走れメロス」の授業において、「『走れメロス』の主題は友情？」という単元を設定した。従来、「友情と信頼の物語」という一つの主題で学習されることが多かった本単元を、「一つの主題に集約してしまわず描写に注目することで作品の読みを深め、そう考えた根拠をもとに、意見を交流させることで多様な読みをさせたいと考え、本主題を設定した。」とある。

また、手立ての工夫として a 振り仮名付き教科書、b 登場人物への好感度を表すバランスシート、c 発表の手引を挙げている。

イ. 実践成果から研究課題の実践に活用できること

a 難しい漢字の読みを定着させたり、文章の内容を確認させたりするために、繰り返し音読をすることが有効である。

b バランスシートやワークシートのように考えを可視化する工夫は大変有効である。

(2) 手立ての工夫について

①「帯単元」について

齋藤（2013）は「帯単元とは1時間の授業をさらに10分とか20分に細分化、それを毎回連続させ単元化するもの」であり、「『やった』だけじゃなく『できる』へつなげる授業法」と述べている。遠藤（2015）は「『書くこと』の始めとして、書き慣れることや発想力を鍛え表現力を高めるために視写と写生文を帯単元として取り入れた。」そのねらいとして、「『書き慣れること』『書くために読むこと』『さまざまな表現にふれる』などの経験を通して『書くこと』への抵抗感を軽減し、少しでも書こうという意欲につなげていきたいと考えた」と述べている。

②「模倣」について

江川（2010）は、「小集団学習に模倣を取り入れた学習方法」について、研究論文の中でその有効性を検証し、「本研究で行われたグループ学習はどのような子ども、どのような教科においても適用でき、かつ有効である可能性が示唆された。」と述べている。

③先行研究から研究課題の実践に活用できること

ア. 授業の導入として帯単元を取り入れ、授業のウォーミングアップ的な効果と、かつ「少しずつ続ける」ことで力をつけることを目指す。
イ. グループ学習における模倣を取り入れ、学習意欲や読解力、表現力の向上を目指す。

3. 実践研究の実際

(1) 生徒の実態調査

授業実践をする1年生の3クラスにおいて、

新入生テスト結果の分析と「国語」についてのアンケートを実施した。そこから見えてきた生徒の実態を踏まえて、どの生徒にとっても「楽しい」、「分かる」と感じられる授業づくりに取り組んでいきたいと考えた。

(2)「帯単元」について

①帯単元のねらい

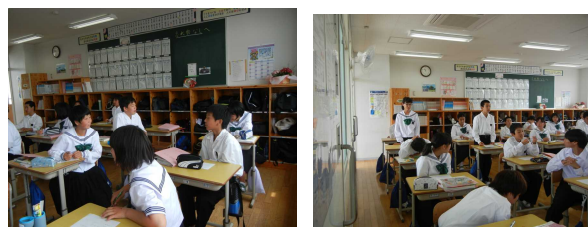
生徒の実態調査から、「話すこと・聞くこと」の領域に注目したい。「話す・聞く」力をつけるためには、繰り返し訓練をすることが必要だと考えた。そこで、限られた実習期間の中で、少しでも「話す・聞く」場面を設定するため、帯単元として毎時間の授業の中に組み込むこととした。

②帯単元：他己紹介をしよう

「話す・聞く」トレーニングとして、ペアによるインタビュー&他己紹介（お互いに友達のことを紹介し合う。）を実施した。実施の流れとしては「教師からテーマの発表→発表の仕方の提示→ペアになり、お互いにインタビューし合う→インタビューして得られた答えを聞き取りメモに書く→教師から発表するペアを指名して、『他己紹介』として発表し合う」となる。

③帯単元：「聞く力」を鍛えよう

「聞き取りテスト用CD」を用いて、テスト形式で実施した。各回、問題は5問の20点満点で6回実施した。

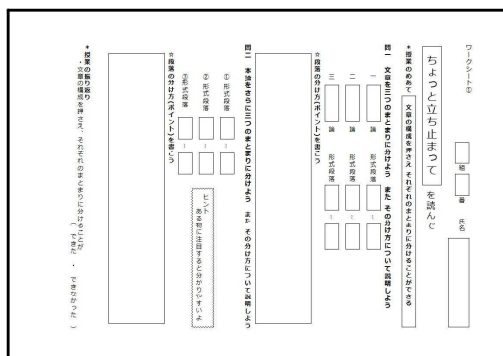


写真（インタビュー、他己紹介の様子）

(3) 授業実践①（説明文）について

「読むこと」の指導に主眼を置いた「ちょっと

立ち止まって」(説明文)の授業実践を行った。個人で学習課題(ワークシート)に取り組みさせた後、「グループのメンバー全員がワークシートを仕上げる」という目標のもと、グループ学習において「模倣」を取り入れた。ワークシートの解答をグループ内で共有し、その際、分からない箇所がある場合は、積極的に「模倣」=「友達の答えや考え方の真似」をするよう指示した。



資料1 ワークシート

(4) 授業実践②(物語文)について

「星の花が降るころに」(物語文)の授業実践を行った。通常の読み取りの学習を行った後、「物語の続きを書く」という課題を設定した。登場人物の人物像や心情の変化等、読み取ったことを活かして書くように指示した。また、物語を書く際の手立てとして、筆者自作の作文例を提示し、表現の仕方や文章の組み立て方を自由に「模倣」してよいという指示を出した。

(5) 実践研究の成果と課題

- ①「他己紹介」は、「話す・聞く」のトレーニングだけではなく、友達とのコミュニケーションをとる良い機会となったようだ。
- ②『「聞く力」を鍛えよう』では、回数を重ねることが得点UPにつながり、さらなる意欲や自信につながっていった生徒が多かった。
- ③グループ学習に「模倣」を取り入れた活動は、苦手児にとって、安心感を持って授業に臨めることにつながったようだ。得意児にとっても、

教えたり教えられたりという活動は有意義に感じられたようだ。

④「物語の続きを書く」学習は、大半の生徒が「楽しい」と感じたようだ。「物語の続きを書く」ことを通して、物語自体の読みが深まったと言える。また、筆者自作の作文例を提示し、それを活用させたことで、どの生徒もオリジナルの作文を仕上げる事ができた。

⑤実践研究の課題としては、帯単元や発展的な学習活動(「物語の続きを書く」)を導入する際の時間設定の工夫、「模倣」をさせる際の課題設定(何を「模倣」するのか)や、手立て(どのように「模倣」するのか)を明示し、生徒に理解させることが挙げられる。

4. 今後の展望

2年間の教職大学院での学びを活かして、今後も「授業づくり」に専念する日々を送りたい。と同時に、これまでのように自分のことだけに精一杯というのではなく、教職27年目のベテラン教師として、学校全体のことや教職員間のコミュニケーションの促進にも配慮できるような存在になりたい。

引用・参考文献

- ・遠藤明子(2015)最終成果報告書『書く力を伸ばす中学校国語科の授業づくり-読み書き関連学習を中心として-』
- ・齋藤隆彦(2013)『今日から始める中学校国語科帯単元学習』国語教育 2013.11
- ・江川克弘(2010)『小集団学習で学習苦手児が得意児を模倣することの有効性の検討-小学校国語科の説明文読解の授業を通して』
- ・第46回徳島県中学校国語研究大会紀要『「生きる力」を育む言語能力の育成-深い学びを実現する課題設定の工夫-』
- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領 国語編」